連載

サンダル履き気ままの旅 7

◇日本と同根？心がなごむベトナム◇

寺井 融
Terai Toru

サイゴン陥落2年後に初訪越 豊かな「南」と貧しい「北」

ベトナムには、北のハノイ（河内）から入国するか、南のホーチミン（旧サイゴン）からにするのか。どちらから入ってもよさそうなものだが、初めて訪越した一九七七年は、サイゴン陥落後二年しか経っておらず、明らかに南と北では違っていた。ひとことで言ったら、豊かな南と貧しい北。どちらが勝者なのかと見まがうほどである。人に接しても、北はきつく、南はやわらかく感じた。

日本青年代表団の一員として、香港、中国の広東を経由して広西チワン族自治区の南寧から空路、ベトナム入りした。まず驚いたのは、ハノイ上空でスクランブルをかけられたことである。中国機に対抗する訓練であり、両国のただならぬ関係を物語っていた。事実、ホーチミン廟では、中国代表団は一般客の列に並ばされ、私たちの団は特別見学コースであった。軍事博物館に行くと、入口に大きな世界地図があり、大陸本土と台湾が、赤と緑に塗り分けられてあった（但し、先年、再び訪れた際は、地図が撤去されていた）。

これら三点と両国間の歴史を踏まえて、帰国後、小坂善太郎元外相の勉強会・千代田会で、「中越間で戦争が起こる可能性が大である」と報告したけれど、理解はされなかった。ご存知の通り、七九年に中越戦争が起こっている。

「南」「中越」「北」で違う民族 激闘の爪跡残る中越国境

つい数年前までは、ホーチミンはオートバイの都で、ハノイは自転車の洪水であった。いまはハノイもオートバイ天国となっている。服装の差も薄れてきた。ただし、旅行する場合、南はバンコクを、北は香港の気候を意識したらよい。その昔、

オートバイが主役

大宅賞作家で『サンゴンから妻と娘』（文春文庫）を書いた近藤紘一さんに、「ベトナムと一口で言ってもですね、南と北、それにダナンやフエの中越とでは食べ物から気質、言葉、もともとの民族を違うのですよ」と教えられた。「北が日程に入っているのなら、寒くない格好を」と忠告されて、薄地のカーデガンを持って行って助かった。その後、ベトナムに十数回訪れた（内容は拙著『朝まだきのベトナム』制作同人社参照）が、教えは守っている。

ベトナム北部といえば、ラオカイ（老街）省やランソン（諒山）省の中越国境も見ている。中越激闘の爪跡も残っていた。

ランソンにはハノイから車で行った。親指や人差し指をノョキノョキ突き立てたような山が連なる地帯を走り抜けた。桂林の漓江下りみたいだった。ランソンの食堂では豚肉や魚介類、野菜もたっぷり入った鍋を食べた。素材を生かした薄味で美味。満腹となってトイレに立つ。柵で仕切られた一郭に子豚十数匹と七十センチメートルほどの犬六匹が飼われていた。連れのベトナム人に「犬がいたよ」と報告したら、「中型犬がうまいですよ。温まりますから食べますか」と訊かれた。子供の頃、犬を飼っていた経験のある私は、勘弁願った。

アオザイ姿の美人

統一鉄道では麺類の朝食サービス 首里城（沖縄）に似たフエの王宮

ラオカイには夜行列車で行った。モン族やザオ族が暮らすサパ（沙覇）に行く外国人観光客で満席だった。イタリア人の若者男女四人組みと同じコンパートメントとなる。「ミラノの工場労働者です。一ヶ月の休暇をとってやってきたんで」と坊主頭の男が、たどたどしい英語で語りかけてきた。ほかの三人は話せない。おぼつかない英語で、相手を務めた。

鉄路は雲南省の昆明まで続く。遮断機を隔てて中国側の河口市（正式には雲南省河口族自治県）が隣接していた。次回は国際列車に乗って、自治県に行きたいと思った。

ハノイからホーチミンまで、国道1号線に沿って走る統一鉄道に乗ったこともある。中ほどのフエまでだったが、一昼夜かかった。朝、車掌がやってきて、プラスチックの容器に入った麺類がわたされる。後ほど、バケツを下げて、またやってきて、汁をそそいでくれた。フォー（ベトナムの米粉麺）の朝食サービスであった。

フエの王宮は、首里城（沖縄県）やマンダレー（ミャンマー）の王宮に似ている。お互い中華文化圏ということであろう。ダナンから南に下ると世界遺産の町・ホイアン（會安）がある。日本人町があったところである。福建会館や広東会館もある。おだやかな空気が支配する路地裏歩きに最適な町で、夕日が美しかった。

さらに下るとニャチャン（慶和）である。東洋のニースと呼ばれる白砂のビーチが有名。教会やお寺、それに市場が見所で、海にはお椀船が浮かんでおり、遊園地もできている。

新婚旅行で人気のダラット 日本と同じ大乗仏教の国

お薦め観光地は、新婚旅行者に大人気のダラットである。ニースから車で3時間、山あいに入った海抜1500メートルの保養地で、とにかく涼しい。キャベツほか高原野菜を作っている。黄色の壁の党幹部の別宅もたくさん建っており、最後の王様・

ダラットのミニ鉄道

バオダイ帝の夏の別荘もある。町の中心部には、階段広場や東京タワー（いや、エッフェル塔）そっくりのテレビ塔があった。この地が林芙美子の小説『浮雲』の舞台だと思うと、いっそう愛着を感じる。

ここには、テレビ朝日系の人気番組「世界の車窓から」でも紹介された全長七㌔のミニ鉄道が走っているから、乗ったらよい。線路の両側の丘には、花々が可愛いらしく咲いている。終点には霊福寺があった。ほかのインドシナ諸国が小乗仏教なのと違い、日本と同じく大乗仏教の国である。参拝すると心がなごんでくる。

世界三大料理のベトナム料理
キノコ鍋に締めの麺は絶品

ホーチミンから下り、ブンタウビーチやビンチャン温泉に行くのも楽しい。メコンデルタの中心都市・カントーでは、早朝に船を出すとよい。そこここに小舟が走り回っている。カボチャ、ニンジンなどの野菜から果物、肉に魚、日用雑貨などが売られている。米の麺を食べさせる舟も出ている。動く市場なのだ。ダイナミックで見ていてあきない筈。

ベトナム人は「ベトナム料理は世界三大料理」と自慢する。「何せ、中国料理とフランス料理の影響を受けていますから」ともいう。確かに生春巻きや海鮮鍋、それに麺類とおいしいものが多い。いま、お気に入りはキノコ鍋である。キノコ五種類ぐらいと魚介類、肉などを、お好みのスープで煮る。ただそれだけだが、パクパク食べられる。締めの麺などは絶品ですぞ。ハノイとホーチミンに、はやりの店があるのだが、予約をしていないと入れません。地元客でいつも満席です。

本稿では、都市名のカッコ内にできるだけ漢字名を入れてみた。統治者のフランスがアルファベット使用を義務づけるまで漢字を使っていた国である。ベトナム語で「ありがとう」は、「カムオン」という。漢字では「感恩」と書く。

海鮮鍋

歌謡ショーに行くと、五輪真弓の「恋人よ」やかぐや姫の「神田川」を、地元歌手がベトナム語で歌っていたりする。カンリーの「美しい昔」が好きだ（角英夫著『サイゴンの歌姫』ＮＨＫ出版参照）。同曲は最近、リバイバルされた。天童よしみが日本語で歌っている。

■てらいとおる　昭和22年北海道生まれ。46年、中大法卒。雑誌編集者、新聞記者を経て現在、尚美学園大学非常勤講師、ロングステイ財団広報委員、日本旅行作家協会会員。『サンダル履き週末旅行』（竹内書店新社）をはじめとする旅行記のほか、エッセイ『裏方物語』（時評社）がある。

information

大学初!!

スポーツの応援情報は、このサイトから！

学生イベントカレンダーは、学生が参加するスポーツ競技会の開催情報や結果をはじめとして、学生主催の講演会、演奏会などの情報を学生が独自で入力し、中央大学の公式Webサイトや学内の電子掲示板に掲載する仕組みです。

中央大学のトップページ
このバナー 学生が発信する イベント・競技情報 からどうぞ！

www.chuo-u.ac.jp

学生イベントカレンダー
- イベント全体
- スポーツ大会・競技会（主催・参加）
- 演奏会・講演会（主催・参加）
- 一般学生主催のイベント